

台湾高砂族の研究 : 高砂族の研究史と分類(二)

土居, 平

九州大学医療技術短期大学部一般教育

<https://doi.org/10.15017/171>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 14, pp.61-68, 1987-02-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン :
権利関係 :

台湾高砂族の研究

——高砂族の研究史と分類(二)——

土居 平*

A Study on the Formosan Aborigines — (2) —

Taira Doi

3.

台湾高砂族の研究史の区分については、陳奇祿氏による次のような提言がある①。

第1期—17世紀から台湾割讓(1895年)までの300年間

前期 オランダ人占拠時代

後期 明鄭時代、清時代

第2期—1896年～1909年

第3期—1909年～1928年

第4期—1928年～1945年

第5期—光復(1945年)以降

第2期では「東京人類学会」、第3期では「臨時台湾旧慣調査会」の成立、また第4期では臺北帝国大学土俗人種学研究室創設などが挙示されている。こうした見解は、劉斌雄氏②の場合にも見出すことができるし、馬淵氏が「臨時台湾慣調査会」については、「台湾における社会人類学的な研究の発端は、明治34年10月の臨時台湾旧慣調査会の設置にあった」③として、同じような位置づけがなされている。

臨時台湾旧慣調査会の設置にともなって、その第一部長に就任したのは京都帝国大学の岡松参太郎教授(後に第三部長も兼ねることになる)、また第二部長は愛久沢達哉氏で、当初の各部の分担は次のようになっていた。

第一部……法制に関する旧慣調査

第二部……農工商経済に関する旧慣調査

第三部……総督府の指定する法案の起草審議
(明治42年新設)

その成果は『台湾私法』(本文3巻6冊、付属参考書7冊、計13冊5866頁)、『清国行政法』(6巻7冊、索引1冊)、『経済資料報告書』(上・下2冊)として、明治末期から大正初期にかけて公刊されている。

この調査会は、当初の計画では漢民族と平埔族、とりわけ漢民族の慣習法の研究を目的としたものであって、とくに高砂族を対象としたものではなかった。

既述のように、明治42年に第一部行政科から分立した蕃族科による調査事業が開始されることになった。しかし岡松教授自身は『台湾蕃族慣習研究(1)』(1918年)の叙言において「生蕃ニ至リテハ別ニ番務本署(註、明治39年4月警察本署内に蕃務課が置かれ、同42年10月の総督府官制改革によって蕃務本署設置)其他ノ機関アリ其習俗ノ調査ノ如キモ亦其任スル所ニシテ本来旧慣調査ノ範圍ニ属スルモノニアラス、惟旧慣調査ノ事業漸ク終リニ近ツクヤ部員中稍門ヲ得ル者アルニ及ヒ番務本署ノ協議ニ応ジ明治四十二年二月始メテ部員ノ一人ヲシテ試ニ蕃族慣習ノ調査ニ著手セシメタリ」と述べられているように、当初は高砂族調査について、必ずしも積極的な姿勢で臨んでいた訳ではなかった。むしろ「蕃族調査ノ業タルヤ人類学的調査ヲ主眼ト為スベキモノニ属シ予ノ如キ門外漢ノ擔任シ得ベキ所ニアラス、……事業其モノニ関シテモ亦多ク興味ヲ感スル所ナク其調査報告書ノ如キモ永ク之ヲ高閣ニ束ネテ顧ミス自ラ以為ラク蕃俗ノ調査タル人類学的価値アルノ外其慣習ノ

*九州大学医療技術短期大学部一般教育

如キハ法学研究上一顧ノ益ナシ……」との考えであった。しかし「法律上ニ於ケル妻ノ地位ヲ研究スルニ際シ嘗テ番族中母系主義ヲ行フモノアルコトヲ耳ニシタルヲ想起シ妻ノ地位ノ沿革ニ関シ参考スル所アラント欲シ初メテ該報告書ヲ緋キ一読スルニ及ヒ、俄然其慣習ノ法制史上尋常ナラサル貴重ノ材料タルコトヲ発見」するに至り、遂に大著『台湾蕃族慣習研究全八冊』が著されることになったのである。この敍言の日付は大正七年五月二十七日となっているが、教授自身によって現地調査が行われたのではなくして、資料としてはその当時既刊、未刊の『蕃族調査報告書』全8冊（1913～1921年）、『番族慣習調査報告書』5巻8冊（1915～1922年）の各成果とともに、伊能嘉矩氏や森丑之助氏の著書、論文などが利用されたものと思われる。

ところで、この蕃族科によって行われた調査の性格について小島麗逸氏は、臨時台湾旧慣調査会による警察関係者の大量動員については「言語上の問題」があった、としながらも「明治四十一年から四十二年にかけて多くの人々が調査に動員されたことが知られる。その大部分は警察関係者である。おのずから、調査の性格が判明しよう。討伐を通しながら、「生蕃」地域を調査することになった」④と、表題に沿った記述がなされている。ちなみに、いわゆる『佐久間総督五箇年計画理蕃事業』⑤は明治43年度から始まったが、当時の「蕃地警察機関」は明治37年（1022）、同38年（1281）、同39年（1672）、同40年（1897）、同41年（2159）、同42年（2062）、同43年（1611）、同44年（1798）、同45年（1610）という数に達している⑥。

他方、山根幸夫氏は「高山族の慣習調査は、わが国における最初の総合的な人類学的調査であったといえよう。調査会本来の台湾統治に役立てるといふ目的からすれば、必ずしも適わしい事業でなかったかも知れないが、高山族に関する文化人類学的調査の基礎を設定したという意味では、上記の二報告書をはじめ、森丑之助の両著、岡松の大著などは、すぐれた価値をもつ

ものといわねばならない」⑦と述べ、「国策遂行の一環として実施されたことは云う迄もないが、その故に調査事業の学術的価値まで否定し去ることはできない」⑧との見解を示されている。

『台湾私法』や『清国行政法』についても同じようなことが言えようが、あの時点で、もしもこの蕃族科による調査が無かったとしたら、高砂族に関する全島的な、かつ全部族（ヤミ族を除く）にわたる資料を、組織的なかたちで残す事は出来なかったであろう。もちろん、戴氏にみられるように「研究の材料として利用され、自らも材料を提供してきた高山族はやがて自分たちを一番よく理解（？）している人たち、数少ない真なる味方と思ひ込んできた人類学の諸先生に幻滅を覚えて絶縁状を突きつける日が間もなくくるかもしれない。目覚めた高山族の志あるものは、おそらく学者先生方がまとめた論文、彼らもしくは彼らの先輩たちの協力で台湾総督府当局が発行した膨大な資料の山（たとえば『理蕃誌稿』、『臨時台湾旧慣調査会第一部、蕃族調査報告書全八冊』、『台湾蕃族図譜第一巻、第二巻』、『台湾蕃族慣習研究』、『高砂族調査書』等々）を「理蕃」誌稿でも「理蕃」のための資料でもまったくなく、まさに彼らの抵抗史の資料として、奪われた歴史、破壊された自らの文化と伝統を再建するための埋め合わせ用の材料として、それらは利用されるであろう。その際、彼らは彼らを「モノ」としかみないで研究のために自分たちを「ひねくりまわし」、「食い物」にして資料を作成した偉い先生方……」⑨という極めて厳しい発言のある事を承知していない訳ではない。しかし光復後の台湾において、その他の高砂族関係文献とともに、本シリーズも復刻されている。陳氏による「高山族近年由於與外界接觸頻繁和政府的積極輔導、其生活改善頻多、文化改變甚速、昔日形貌幾不可復見。在文化變遷的探究上、舊慣會的業績益感重要、甚望研究高山族的學者能多予利用」⑩との指摘にもあるように、当時の調査記録の持つ意義は極めて大きく、かつ貴重である。そこに記

土 居 平

録されている慣習・伝承物などの中には、今日すでにその面影をさえ止めなくなったものが多い。各種族独自の宗教的行事も、キリスト教の伝道とともに大きな変容を遂げつつあり、中には消滅してしまったものさえある。各村に立てられているキリスト教会には、礼拝のために参集し十字をきる村民の姿を見出すことが出来る。かつて平埔族が漢民族化にともなって、その独自の慣習を喪失しただけではなく、言語さえも死語化させてしまったように、やがては高砂族もそうした道を辿っていく事になるのではなからうか。アジア諸国の中でも近代化のテンポの早い台湾の場合、このような少数民族の文化を保持しながら、同時に一方ではその近代化を進めていく事には、いろいろな困難が伴うであろう。文化財的な保護が意味を持たないことは言うまでもない。

今、高砂族は、各種商品作物の栽培などの普及に伴う経済水準のなだらかな上昇、親たちの教育への関心の増大、あるいは政府による種々の施策などともあいまって、社会移動を伴いながら、大きな変容を遂げつつある。

台湾における高砂族研究は、現在では国立中

央研究院民族学研究所や、台湾大学文学院考古人類学系を中心として行われているが、この事については後に述べる事にしたい。

ところで、この調査会に関して、次の3つの疑問点を指摘することが出来る。

1. 表1にみられるように、この調査会にはかなりのスタッフがいたが、補助委員を除けば、その任期がまちまちであり、また比較的短期間となっている。とくに高砂族に極めて精通し同調査会から『台湾蕃族志』第1巻(1917年)、と『台湾蕃族図譜』2巻(1915年)を出版している森丑之助氏と、同じくこれまでに台湾史や、高砂族、平埔族に関する多数の著書や論文を発表している伊能嘉矩氏の二人が、いずれもこの調査事業の一員として発令された任期が比較的短期間にとどまった事と、この二人の名前が『蕃族慣習調査報告書』と『蕃族調査報告書』のいずれにも出ていない事情。

2. 内容的には非常に似ている『蕃族慣習調査報告書』と『蕃族調査報告書』と、さらにはタイヤル族に関する森氏の『台湾蕃族志』を含めて、時期もほぼ相前後して、同じ調査会から別々のシリーズとして出版された事情。

表一. 臨時台湾旧慣調査会のメンバー (一部)

氏 名	職 名	就 職 年 月 日	解 職 年 月 日	備 考
小島由道	補助委員	明治 36年 5月 9日		死亡(馘首)
平井又八	補助委員	44年 3月 24日	明治 44年 8月 23日	
河野喜六	補助委員	45年 3月 23日	大正 4年 3月 31日	
佐山融吉	補助委員	45年 5月 9日	4年 3月 31日	
同		大正 5年 7月 20日		
森丑之助	嘱 託	明治 41年 4月 7日	明治 43年 9月 30日	
同	託	大正 3年 7月 11日	大正 4年 3月 31日	
大浦元三郎	嘱 託	明治 44年 7月 11日	明治 45年 5月 28日	蕃務本署勤務
浅岡 誠	嘱 託託	明治 44年 7月 11日	明治 45年 5月 28日	
伊能嘉矩	嘱 託	明治 41年 2月 29日	明治 43年 11月 30日	蕃務本署勤務
同		44年 7月 1日	45年 5月 28日	
渡辺栄次郎	嘱 託	明治 42年 7月 2日	大正 2年 5月 30日	
安原信三	雇	大正 2年 1月 24日	4年 3月 31日	
同		5年 9月 7日	5年 2月 18日	
小林保祥	雇	大正 6年 1月 31日		

* 他に警察関係者、公学校教諭など無給の25名がある。
 (小島麗逸 1980「日本帝国主義の台湾山地支配—対高山族調査史—その2」『台湾近現代史研究』第3号 p.16 による)

まず、森氏について馬淵氏は「多年に亘る高砂族実地調査の経験を有しながら、上記の調査事業に参加していないのは少々異とするに足る。或いは不羈奔放な同氏の性格が台湾流の官庁気風と相容れなかったかに想像されぬでもない」⑩と述べられているが、森氏については「博物館創立三十年記念座談会」⑪、その他にも記録が残されている。つぎに、伊能嘉矩氏とこの調査会との関係について直接論じた文献は未見であるが、同氏は当初の『台湾蕃人事情』の頃を除いてはどちらかと言えば書斎の人であって、現地調査を得意とした訳ではない。ただ『蕃族慣習調査報告書第一巻』中に「本族ト漢人トノ接触ニ関スル歴史ニ付キテハ台湾蕃政史ニ於テ既ニ其詳ヲ尽シタルヲ以テ之ヲ略ス」(p.27)との記述があるが、ここでいう台湾蕃政史は、伊能嘉矩氏の『台湾蕃政志』(1904年)を指していることは明らかで、伊能氏の本調査会への関わり方の一端と見做すことが出来よう。

次に、これら一連の調査報告が別々のシリーズとして出版されたことについて、馬淵氏は「その間の事情は明らかでない」として「内容からみれば、前著(『蕃族慣習調査報告書』)には慣習法探究というような色彩が多少濃厚であるのに対し、後著(『蕃族調査報告書』)は稍々一層包括的で、むしろ社会人類学的または文化人類学的な報告書だといえるかも知れない。但し、これはあくまで相対的な印象の差に止まる」⑫と述べられているし、また陳奇祿氏も「内容前者(『蕃族調査報告書』)偏重物質文化和生活習慣方面、而後(『蕃族慣習調査報告書』)則偏重於社会組織和親属関係方面」⑬との見解を示されている()内筆者注)。

こうなると内容的な検討が必要になるが、今これを全冊について行う訳にはいかないので「タイヤル族」に関する記述の一部について対照してみることにした。

小島由道氏は『蕃族慣習調査報告書第一巻』の序言(大正三年十月)で「余ハ明治42年(1909年)命ヲ承ケ始メテ本島生番ノ一タルたいやる族ノ慣習調査ニ従事シ翌四十三年四月ニ至リ其

大體ヲ了セリ……」と述べているように、蕃族科の発足と同時にタイヤル族調査に取り組み、一年余でこれを終えている。しかし大正元年十二月に提出した報告書は慣習に関する事項にとどまったために、土俗については安原信三、地誌の概要と部族の分布については浅岡 誠、慣習については渡辺栄次郎の各氏がそれぞれ担当したことが明記されている。

一方の佐山融吉氏は『蕃族調査報告書大ム族前篇』の緒言(大正七年二月二十五日)では、その経過については触れることなく、調査時に便利を受けた人々に対する謝辞にとどまっている。

次に、その各部族に関する記述について比較してみると、『蕃族慣習調査報告書第一巻』ではタイヤル族の一支派と認められていた霧社、トロック、タウサア、タウサイ、大魯閣、木瓜の諸番については未調査であるとした上で、セイダッカと自称して純粋のタイヤル族とは言語、風俗、祖先に関する伝説を異としていると聞いているから、便宜上これをセイダッカ族とする、として「本報告ハ便宜上之レヲ區別シせいだっか族ノ名ヲ以テ之ヲ表スルコトトセリ。従テ本報告ニ於テたいやる族ト称スルハ純粋ノたいやる族ニ限り其支流トシテ目セラル、せいだっか族ヲ含マズ」(p.1~2)となっている⑭。

これに対して『蕃族調査報告書大ム族前・後篇』では「タイヤル」族を20部族として、そしてやはり「サゼク族」(霧社、タウダー、トロック、内太魯閣、外太魯閣、タウサイ、木瓜)を掲げている。

また『蕃族慣習調査報告書』は各部族ごとに、社名を記してそれぞれについて、社名の由来を述べている。これに対して『蕃族調査報告書』は、各部族の由来について述べている⑮。

つぎに宗教について『蕃族慣習調査報告書』では、祭祀の種類として

1. 「スマットー」(播種祭)
2. 「ターレン、キミロフ」(摘穂祭)
3. 「シミュシ」(祖霊祭)

の3種を挙げて、それらの祭祀が「スマットー」

と「シミユシ」は族衆共同で、「ターレン、キミロフ」は共同、あるいは各戸ごとに行われると報告している。また、その祭祀団体は「祭祀ニハ一定ノ団体アリ、之ヲ「コートフ、ガガー」ト言フ。「ガガー」ハ慣習又ハ祭祀ヲ意味シ「コートフ」ハ又ハ共同ヲ意味ス、故ニ「コートフ、ガガー」ハ共同祭祀ノ義ナリ」(p.57)として、各部族についてその組織を明らかにしている。すなわち

1. 大料炭、がおがん、屈尺諸番（一部落にある宗族で組織されるために四五戸～七八戸、中には一戸孤立するものもある）
2. 溪頭、南澳、大湖、汶水、からばい、北勢諸番（宗族に関わりなく一部落全体で構成）
3. 稍来、くしゃ、ばいばら、はっく、まりっぱ、萬大諸番（一部族で組織され、各社は共同して祭祀を行うために、大組織になる）こと。

さらにその祭主や、祭祀の方式についても上記諸番ごとに記載されている。

一方の『蕃族調査報告書』でも各蕃についての社会的組織や、宗教などについての記述がなされているが、両著の間には記述の力点に差異がみられるのは当然である。

ここで、タイヤル族の一部族である白狗番について、両著を比較してみると『蕃族慣習調査報告書』では「本番ハ自称シテはつくるト言フ。「ハククル」トハ奥山を意味ス、本番ノ住地カ深く山中ニ在ルニ因リテ斯克名ツケタルナルベシ

本番ハ白姑大山ノ南即北港溪ノ上流ニ沿ヒテ占居スル部族ニシテ三社ヨリ成リ戸口九十人口四百四十九ヲ有ス東ハまれっぱ番ニ接シ西ハばいばあら番ニ隣シ北ハ白姑大山ニ至リ南ハ北東眼山ヲ以テとろく、たうさあ両番（せいであか族）ノ領域ニ接ス」(p.18)となっている。一方の『蕃族調査報告書大么族前篇』では「北港溪ノ上流ニ散在スル「マシトバオン」「テビルン」「マカナジー」「ジーヘン」ノ四社ヨリ成ル而シテ「ハック」トハ「マクツ」即チ運ブノ転訛ナルコト口碑ノ項ニテ解ケルガ如シ尚ホ本番ヲ以テ「タイヤル」族ノ本族ト為スヲ得ベシ

(p.2)とある。

まず「はつくる」という部族名の由来について両著は全く別々の解釈を示しているのである。『蕃族調査報告書』で白狗番を構成するのは4社とされているが、その中の「ジーヘン」社は正しくは白狗番ではなくしてマレツパ番に属するのである^⑭。またハククルという名称については、森氏も「奥山」としているし、安倍明義氏も同じく「奥山」の意味だとしている^⑮。

以上のように、両シリーズの極く一部を比較してみても、内容に限って言えばこれを特に別のシリーズとして出版しなければならないような必然性は見当たらないようである。これらの報告書は、そこにどのような事情が介在したのかは判らないが、むしろその間の異同を正し、精粗を相互に補完し、重複を避け、用語を統一するなどの編集がなされ、さらに種族毎に部族や社の整理が行われ、事項についての索引が用意されていたならば、その評価はさらに高いものとなったであろう。両著の詳細な対照と検討はなお今後の課題としておく。

第3のヤミ族に関する調査が行われなかった事について論及した文献については、現在までのところ未見である。そこで、考えられる幾つかの理由を挙げて推測してみる事にした。まず、ヤミ族の居住する紅頭嶼が台湾本島の東南およそ40マイルのバシー海峡に浮かぶ、わずか48平方キロメートルの孤島であり、邦人との直接的な接触がなかったことが挙げられよう。しかもその人口はサイセツ族に次いで少なく（7社305戸、1,445人、大正5年現在）、とりあげるような資源を産出した訳でもない。それに、このヤミ族は高砂族の中では唯一の首狩りの慣習を持たない部族であった。しかもバシー海峡の孤島で交通不便と言う事情もあったかもしれない。しかしなによりも『理蕃誌稿第1・2編』をみても分かるように、ヤミ族については僅かに「紅頭

嶼蕃ノ膺懲」(明治37年)として、米国帆船ベンジャミン・セオール号をめぐるトラブルに関する記録(p.318～319)を見出す程度である。高砂族中もっとも少数であるサイセット族(10社, 183戸, 1,149人, 大正5年現在)は、本島内に居住し、首狩りの慣習を保持していた事もあってか、『蕃族慣習調査報告書第3巻』が当てられているのである。これらの事情から見ても、ヤミ族については、統治上からも、理蕃上からも「調査研究」の緊急性と必要性を認められていなかったものと思われる。

岡松氏の『台湾蕃族慣習調査研究(1)』では、ヤミ族に関する記述も散見されるが、「本族ニ付テハ尚全ク調査ヲ缺キ詳細ヲ知ルヲ得ス」(p.34)と記されている。

後の『台湾高砂族系統所属の研究』においても「系統所属に関する調査には、時日に余裕なく、紅頭嶼へ渡る機会が誰も無かった」ために、昭和4年時点の手記をもってこれに当てられている。1902年鳥居氏によって命名されたヤミ族であるが、その後奥田氏等による「紅頭嶼ヤミ族の社会組織について」(『社会経済史学』8巻11号, 1939), 鹿野忠雄「紅頭嶼ヤミ族と飛魚」(『太平洋圏民族と文化』上巻), 『東南亜細亜民族学先史学研究第一巻』などでかなりの研究が行われたが、いずれも昭和10年代以降のことである。光復後の同島に関する民族学的な調査報告は、1962年の衛惠林, 劉斌雄氏『蘭嶼雅美族的社会組織』(中央研究院民族学研究所專刊之一)が先ず挙げられなければならないし、その他にも採り上げるべき調査報告があるが、その詳細については別稿に譲ることにしたい。

註 (①は引用文献, ○は関連文献)

- ① 陳奇祿 1974 「『臨時臺灣舊慣調査會』與臺灣高山研究」『臺灣風物』24(4)p.1.
- 陳奇祿 1951 「臨時臺灣舊慣調査會有關山族出版物内容學要」『台湾風土』第140～142期
- ② 劉斌雄 1975 「日本學人之高山族研究」

『中央研究院民族學研究所集刊』第40期 p.5～16

本論文では、陳奇祿氏の上記論文を始め、宋文薰(1952「鳥居龍藏與臺灣」『臺灣風物』2(2):6-8), 『季刊民族学研究』の「台湾研究特集」(18巻1-2合刊1953), 吉原弥生女士作年表『日本学者之高山族研究著作年代表』として整理し、東京人類学会の成立から、1945年までの研究概要についての詳細な報告がなされている。

③ 馬淵東一 1953「高砂族に関する社会人類学」『民族学研究』18巻1-2合刊p.89.

④ 小島麗逸 1980「日本帝国主義の台湾山地支配—対高山族調査史—その2」『台湾近現代史研究』第3号 p.16.

⑤ 台湾総督府警察本署 1918年『理蕃史稿』第1・2編, 跋 p.1.

「改隸當時の對蕃政策ハ専ラ之ヲ懷柔スルニ在リシモ蕃人の頑迷不靈ナル跋扈披猖愈久ウシテ愈甚シク到底懷柔ノミヲ以テ之ヲ理ムルハザルニ由リ威圧撫綏併セ用ウルノ方針ニ出懲二次グニ 懲ヲ以テシ以テ明治四十二年ニ至レリ而モ、ガオガン, マリコワン, キナジー, 南澳, 北勢, 太魯閣の諸蕃ハ 強自ラ負ミ險ニ抛テ我ニ抗セリ是ニ於テ同年十月ヲ以テ台湾総督府官制並台湾総督府地方官制ヲ改正シ翌年四月ヨリ所謂五箇年計畫理蕃事業ノ実施ニ著手セラレ大正四年ノ春ヲ以テ予期ノ如ク行動ヲ完了」している。

⑥ 台湾救済団 1932『佐久間左馬太』p.806～807.

⑦ 山根幸夫 1976「臨時台湾旧慣調査会の成果」p.109.『論集 近代中国と日本』所収

⑧ p.112『 “ ” 』

この論文は臨時台湾旧慣調査会と台湾慣習研究会に関して、多数の文献を渉猟して記述され、当該問題に関する最も基本的な文献の一つである。

⑨ 戴国 1981年「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味—台湾少数民族が問いかけるもの—」『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』

pp.31～32.

- ⑩ 陳奇祿 1974 前掲論文 p.18.
 ⑪ 馬淵東一 1953 前掲論文 p.91.
 ⑫ 台湾博物館協会 1939 『台湾総督府博物館創立三十年記念論文集』 p.388～394.

本論文集の「博物館創立三十年記念座談会」速記の一部。

〔出席者〕

青木文一郎	台北帝国大学理農学部	教授
早坂一郎	同	同
素木得一	同	同
移川子之藏	同	文政学部
堀川安一	台北第二師範学校	教諭
丹 桂之助	台北帝国大学理農学部	助教授
立石新吉	同	同
宮本延人	同	文政学部
山本運一	台北第一高等女学校	教諭
佐々木亀雄	台北州	社会教育主事
尾崎秀眞	博物館協会	理事

「森君は川上さんに助けられてあれ丈蕃界の調査をやるようになった……それから東京に偉い人が居るからね、坪井（正五郎）さんに噛りついてやっただんです。坪井さんも宜い加減にあしらって居った様です」「通訳をして居りました、物を相当考えて観察すると云った相当の遣り手です」「あの当時誰も蕃界等に行き、互らない目に遭うのを嫌がる時代に、山の中に居って出張命令で出たが最後、何処に居るか判らない、之が役人として方々の役所に迷惑を及ぼしたらしい」などの発言がみられる。

また、大正9年に台湾旅行をした作家佐藤春夫は『霧社』（1936年昭森社刊）の中で「この旅行に於て予はこの人に負うところが最も多い。旅行日程はこの人の手によって作られたし、また予をS民政長官に介されたのもこのM氏である。氏は隠れたる好学の士であると同時に探検的の実地踏査者で、この島の蕃山を氏ほど深く探った人はないと言われているが、驚くべき敬ふべき事には氏はその踏査の間終始身に寸鉄をさへ帯びなかつたと云う事である」（p.175～177）と述べるなど、森氏の人柄や高砂族観観などについて好意的な紹介がなされている。さ

らに森氏自身『台湾蕃族志』の「付録 台湾蕃族に就て」の中で「台湾蕃地探検の動機」が語られ、鳥居龍藏氏、坪井正五郎氏との関係についての言及がある。森氏による高砂族踏査は全島に及んでいるが、タイヤル族については明治28年9月の渡台以来、大正4年までに未踏査地として残ったのはシャカロウ蕃とキナジー蕃の一部だけであったと言う。また「氏の蒐集になる高砂族土俗品は非常に多く、旧台湾総督府博物館の蕃族土俗品の中核をなすもので、今日も台湾省立博物館の所藏品として保存されている」（宮本延人「台湾民族学研究史概説」『民族学研究』18巻第1～2号、1953）ように、土俗品蒐集の面でも大きな役割を果たしており、高砂族研究史に残る人物の一人である。

伊能氏は明治28年11月に渡台、同末年に郷里岩手県遠野町に帰郷し、大正14年9月に亡くなっているが、既に記したように栗野氏との共著『台湾蕃人事情』をはじめとして『台湾志』、『台湾蕃政史』、『台湾文化史』などの他、多くの著書、論文を発表している。とくに平埔族に関するものは、当時すでに漢民族化が進んでいたことからしても、貴重なものとして高く評価されている。

- 真宗本派本願寺台湾別院 1935
『真宗本派本願寺台湾開教史』
- 台湾総督府警務局 1920『理蕃誌稿』第3編
- 戴国輝 1968「日本人による台湾研究—台湾旧慣調査について—」『季刊東亜』4 p.67～80
- 福島正夫 1958「岡松参太郎博士の台湾旧慣調査と華北農村慣行調査における末広巖太郎博士」『東洋文化』25.
- ⑬ 馬淵東一 1953「高砂族に関する社会人類学」『民族学研究』18巻1-2合刊p.91.
「臨時台湾旧慣調査会」の来歴や事業内容などについては、手もとに参照すべき

資料が乏しく、井出季知太『南進台湾史攷』及び岡松参太郎『台湾蕃族慣習研究』の第1巻敍言に依ったのみである」と注記されている事を断っておく。なおこの論文では諸外国の、とりわけオランダによるジャワを中心とする植民地慣習法研究の一端を紹介して、この調査会のもつ学史的意義を国際的にも位置づける視点に立った論及がなされている。

⑭ 陳奇祿 1974 前掲論文 p.18.

⑮ 森丑之助 1916年『台湾蕃族志』で「タイヤル族蕃人に関する図書」の1冊に『蕃族慣習調査報告書第一巻』を挙げているが「タイヤル族に関する一般的記述にして蕃務に関する官署の調査書と著者の蕃地に旅行して調査したるものを参酌して編纂せしもの本書のうちには同種族に属するタロコ蕃外五部族は別として除外しあり」(叙文p.7)。また本文中でも「世上一局部の蕃界に皮想の觀察を為せる者は、単に言語上一部分の変化あるを根拠として、タロコ蕃系統の数部族と、ガオガン蕃系統の多くの部族とは、之を種族を別に分たんとし、甚しきに至りては、前者を以て、タイヤル族に非らずとして除外し、別に異なる名称の一種族を立てんとする者さえあり、蓋し謬想にして愚劣なる見解」(p.7~8)である、と批判している。

⑯ ここに記載された数字は、森氏のものと同一致しているが、森氏は「頭目及族長の部下戸数は明治四十五年二月調査せしものなるを以

て、中には其社の総人口及戸数を示せる数字と一致せざるものあるべし、蕃社戸口としては大正元年十二月現在の統計に拠れり、其うちタロコ蕃タウサイ蕃に属する分のみは大正四年六月花蓮港廳調査の資料に拠」として、その出典を明記している。

⑰ 台北帝国大学土俗人種研究室 1935

『台湾高砂族系統所属の研究』p.26.

⑱ 安倍明義 1938年『台湾地名研究』p.202.

本著の参考文献の中に『蕃族調査報告書』は挙げられているが『蕃族慣習調査報告書』は見当たらない。

本研究では多数の文献資料を必要とするが、その殆どは戦前に出版されたもので、また台湾で印刷・発行されたものや、極く少数の刊行にとどまったものもあり、所蔵されているものが比較的少ないものや、所蔵を確認出来ないものもある。こうした事情の中で、関係文献の閲覧、複写などについて九州大学図書館、法学部、経済学部、農学部、文学部などの各図書室を始め国会図書館、天理大学、大分大学、東京大学、京都大学、アジア経済研究所など各図書館の御協力を得ることが出来た。とくに九州大学図書館医学部分館の出島照義、深川光郎、松永るみ子の三氏には文献検索、所蔵図書館の確認、閲覧、複写等でひとかたならぬお世話になった。ここに記して深い謝意を表したい。